

序

大化5年（649年）に謀反の嫌疑を受けた石川麻呂が氏寺である山田寺の仏殿で自害したのは、大化改新の余波にかかわる蘇我氏の悲劇であった。しかし、山田寺は、石川麻呂の没後も建設が進捗し、7世紀後半に完成をみた。その後、平安時代末頃に焼亡するが、鎌倉時代、さらに江戸時代には廃寺の一隅に堂宇が再興され、今日に至るまで名刹の法燈が伝えられている。

山田寺の廃寺跡は、奈良県桜井市山田にあり、華麗な蓮華文様をかざる軒丸瓦や礎石がいわゆる白鳳様式を代表するものとして重視され、1921年には国史跡、1952年には特別史跡に指定された。

1970年代になって、文化庁はこの史跡を整備して国民に広く活用する方針をかため、事前の発掘調査を奈良国立文化財研究所が担当することになった。発掘調査は、1976年から始まり、間で途切れることがあったが、1996年まで約20年にわたって継続し、寺域のほぼ半分を発掘した。その間に、他に例をみない山田寺式ともいえる堂塔の構造や平安時代に地崩れによって倒壊した回廊の建物が明らかにされ、境内からは金箔貼付けの塼仏や膨大な屋根瓦など仏教美術・建築史などにおける重要な発見が相次いだ。

発掘成果にもとづく史跡地の遺構表示などの整備事業についても当研究所がかかわり、第1期工事が終了している。とくに建築史学会から注目された倒壊した回廊の建物については、1995年に『山田寺出土建築部材集成』として刊行するとともに、保存のために樹脂加工した部材を復元的に組み立てて飛鳥資料館の展示に供している。

発掘調査の成果については、調査のたびに概報にまとめるとともに、金堂、塔、講堂、回廊など伽藍中枢部の構造が明らかになった1981年には当研究所の飛鳥資料館において『山田寺展』を企画展示した。それから約20年余り、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では発掘作業が増大の一途をたどり、あるいはきわめて良好な状況で発見された膨大な瓦磚類に関する煩雑な整理作業に追われたために、報告書の編集が遅れることになったが、この度ようやく完成にこぎつけた。

本書に収録する多岐にわたる学問的な成果は、現在の調査部員が行った調査研究の賜であることは言うまでもないが、これまでに飛鳥藤原宮跡発掘調査部を去来した多くの調査員が後輩に託した宝物であることも忘れてはなるまい。

2002年は当研究所が開設されてから50年目の節目に当たる。この記念すべき年に本報告が出版にこぎつけたことを慶ぶとともに、本書が多くの人たちの目に触れて古代国家黎明期における仏教寺院に関する理解が少しでも広がることを願う次第である。最後に、特別史跡「山田寺跡」の発掘調査と整備事業に際して、ひとかたならぬ協力をいただいた地元の皆様、桜井市教育委員会、奈良県教育委員会、関係各位に対して、この場を借りてお礼申し上げます。

2002年3月

独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所長

町 田 章